

優秀賞

書評『ホッブズ リヴァイアサンの哲学者』(2016)

田中浩  
岩波書店

商経学部 商学科  
一年 山下柁樹

「万人の万人にたいする闘争状態」が人間の自然の状態であることを唱えたホッブズ。

本書の冒頭で、著者は「こんにちの日本では、ロックやルソーの名前は民主主義思想の先駆者として広く一般に知られている」、「これにたいしてホッブズは『リヴァイアサン』という奇妙なタイトルをつけたことによって、権力色の強い人というマイナス・イメージでとらえられている」、しかし「ホッブズこそが近代国家論の真の創始者」だと述べている。

本書では、ホッブズの多面的な思想と生涯を描いている。現代社会において、テロ行為や紛争は無くならない状況にある。そこで、著者はホッブズが主張した「生命の安全」（自己保存）に注目した。彼のこの思想を理解することこそが現在の争いの絶えない社会を変えて、世界平和を実現するための方法だと著者は考えている。

著者である田中浩は日本の政治学者であり、本書以外にも戦後の日本についての単著がいくつかある。彼は太平洋戦争が始まるより前に生まれている。戦争の渦中を生き抜いてきたからこそ、その辛さを体感したからこそ、その経験を後世の人にさせたくないと思っているのだと私は考えた。ホッブズは「平和を守るためには『武器』を放棄する以外にはない」と述べている。しかし、ホッブズの思想を理解するだけで本当に武器放棄をする日がくるのだろうか。

ホッブズの主著である『リヴァイアサン』には、新たな生活秩序を確立するための主張が述べられている。タイトルには「『国家の平和』を保持するためには主権者（代表）に『強い力を与えよ』」というホッブズの主張が込められている。しかし、議会派から「絶対君主の擁護者」、王党派からは「革命の指導者クロムウェルを弁護する輩」と誤解された。そのため、ホッブズの研究はなかなか認められず、200年近くものあいだ、危険視され無視されてきた。

著者は「ホッブズの政治学を理解するためには、これまでのホッブズ研究で軽視されがちであった『宗教と国家』をめぐる問題を抜きにしてはなるまい」と主張している。ホッブズは「『イエスは救い主である』という一点について和解せよ」と提案しており、著者は、この考え方が、後の「宗教の自由」に行きつくと述べている。この思想のためにホッブズは、キリスト教は教えるものにすぎないとキリスト教会を支配してきたローマ教皇や

カトリック教会に対して、たったひとりで戦いを挑んだ。私はホッブズの考える宗教の自由は、世界平和の鍵になると推測する。現在、世界には多種多様の宗教があり、様々な文化が存在する。その中で、相手の宗教を受け入れることが、他者理解に繋がる。そして、相手の個性を受け入れることで、対立や紛争を減らせると私は考える。

ホッブズは晩年に二篇の自伝を書いた。しかし、どちらも短編で内容も抽象的に書かれているため、著者は、オーブリーの『名士小伝』も参考にしつつ、ホッブズの思想と行動を明らかにしている。そこには、ホッブズという人物像により具体性を持たせようとする、著者の工夫が見える。自伝でホッブズは、スペインの無敵艦隊がイングランドを襲撃する噂を聞いて驚いた臨月の母親が予定よりも早く自分を産み落としたことから、自らを「危険と双子」と記している。この話は興味深く、ユーモアがある。実際に、イギリス艦隊と九日間の砲火の末、スペイン側が敗北し、それ以降イギリス資本主義が世界を制することとなった。このことから、著者は、ホッブズのことを「イギリス資本主義の発展期とともに生きた正統の子」だと言う。また、ピューリタン革命前の亡命第一号だったこと、早々と新政府へ帰順を決断したことから、ホッブズを「勇気ある人物」と評している。しかし私は、本書でホッブズのことを知る中で、彼の生き様や思想からむしろ「信念を曲げない人物」と読める。

ホッブズは『リヴァイアサン』を執筆する前に『法の原則』と『市民論』を書いている。しかし、これらの三冊のあいだには、内容が充実し整理されているという一点を除いて、基本的にはほとんど変化がない。これについて著者は「ホッブズの政治姿勢は一貫してゆるぎないものであった。かれが『生命の安全』という観点からのみ政治をみつめ、その解決策を考えていてから」だと説いている。確かに、ホッブズは世界平和を心から願っており、そのためにも“生命の安全”は切っても切れないものだ。今後、紛争が絶えない世の中では、武器を放棄することは難しいだろう。だからこそ少しでも多くの人にホッブズの思想を理解してもらいたい。本書には、そんな著者の思いが込められているのではないだろうか。世界平和を望む私たちにとって、本書は重要な一冊だと言える。